

オーストラリア原住民の語彙

横瀬 弘幸

Australian Aboriginal Languages

Hiroyuki YOKOSE

Abstract

アボリジニー言語は使用されるのが少なくなっているが、現実にラジオやテレビでも放送されている。アボリジニー語はオーストラリア英語を学ぶ者にとっては欠かせない。オーストラリア英語はどのように関わりを持っているのか、またどの位存在しているのか、など考察してみる。

アボリジニー言語の難解さはいうまでもなく多言語と比較すると複雑ではない。異なった文化の人々は異なった事柄について話し、そこには二つの言語が生じ、まぎれもない言語となる。例えば、エスキモー語の雪、氷、犬、アザラシ、セイウチ、等のようなものである。エスキモーの辞書によると、雪や氷の状況は状況に応じて異なった表現となる。一方、オーストラリア中心部に生活をしているアボリジニーは雪の知識はまったくなく、氷の知識は霜の降る夜水面に時折できる氷である。それと反して、彼らの世界は唯一カンガルー、エミュー、トカゲ、鳥である。また、アボリジニー語はカンガルーと違った種類のことばトカゲ、イグアナ等を代用している。彼らにアボリジニー語は幾つあるのか尋ねてもほんの少しであると言う。詳しく調べられていないので確かに幾つ存在するのか知られていない。また、人は英語と同じくらいだと

云う者もいる。結局彼らは2千語位しか知らないと言う。

英語を話す人は英語では解らない植物や動物の語が多く存在する。それらはまた儀式のための服、その用具一式、宗教的儀式の全ては英語に於いては相当しないものばかりである。よい例は200年前のブーメランである。ヨーロッパ人が考えてもいなかったものがアボリジニーにあったことが実証済みである。英語圏に定住していた者がアボリジニーの語を使い、英語の一部としたのである。オーストラリア・アボリジニー言語は少なくとも一萬語と推定される。これは英語に精通している人の平均的な数字に値する。英語は言うまでもなく、特殊な商業貿易、まれにしか使わない語、廃語、シェークスピアの戯曲に表れている語も含むと10万語以上にもなる。これらの相当数の語は世界中を取り巻く英語を話す地域からもたらされたものである。

アボリジニーの人々はオーストラリア人に取り囲まれ、その環境は四方数百キロまで進み、彼らは少なくなるものと予測された。しかし、アボリジニー言語を使う多くの人は想像以上多くの語彙を使っていた。アボリジニーの語彙は英語より一貫して識別されている。例えば、兄弟姉妹を語るとき、彼らは男女の別なく兄弟の一人という。しかし、彼らは年齢で区別する。たいていのアボリジニー語は姉、兄と別の語がある。また弟、妹も同様である。性別の区別が無いのは兄弟間では珍しいことではない。これは、人気のあるといわれている Kalkatungu または Kalkadoon 語の場合である。

elder brother tabu
elder sister puwa
younger sibling unggurl

オーストラリア・アボリジニー言語は英語にある hit と kill がある。このことは英語を話す者にとって潜在的に危険性と混乱を招くだろうが、たいていそれがどの意味かコンテキストから明白となる。もし一匹の蛇が赤ちゃんの近くをはっていると Kalkatungu で laya tuwat (laya とは hit または kill の意味で、tuwat とは蛇のことである) そこにいる一人の見物人はその蛇を殺す指示としての laya の意味を理解しないであろう。

一方、犬に吠えられている人がいたら、その近くにいる息子に laya tuka と言う。Tuka とは犬の意味で、その者は人の最愛の友を殺せとは言わない。しかしながら人は kill と hit は意味は違うと考え、それを死ぬまで打つと意味することと言う。しかし、laya のような語は英語の hit や kill より広い範囲をカバーするように思える。アボリジニー語は手で打つと道具を使って打つなど飛び道具で打つなどを区別している。

Laya tuwat yalkabari-tu

Laya は殺す、tuwat は蛇、yalkabari はブーメランで殺しなさいを意味している。もし、人が誰かにブーメランを投げ殺すことを云いたいのなら indyiyi 語が使われなければならない。

indyiyi waagarla yalkabari-tu
hit crow boomerang-with
Hit the crow by throwing a boomerang
(ブーメランで殺す)

またアボリジニー言語は穴を区別している。英語の hole は Pintupi 辞書によると、その中で Ken と Lesley Hansen 氏が次のように示している。

ngarti	地面やある物体にある小さな穴
yarla	ある物体にある小さな穴
kunawirtinpa, muluwirtinpa,	
mutara	ウメラのフックが入っている 槍にある穴
pirti	地面にある穴
kartalpa	地面にある小さい穴
yulpilpa	アリたちが住んでいる狭い穴
pulpa	地面にウサギなどが掘った穴
nyarrkalpa	小さな動物たちの穴
warayi	ウサギの穴
tyuuripa, yaranpa, makarnpa	イグアナの穴
katarta	冬眠の後イグアナによって作 られた穴
kurrumpari	地下のトンネル、ウサギの穴 で、太陽にあたるように東から 西へとトンネルはできている。
tyurnti	

pirnki 岩や石などで作られた穴や洞穴

武器や道具にも沢山の相違が常にある。ヨーロッパ人はブーメランや槍に関して言葉はあると思っている。アボリジニーにはいくつかのタイプに区別している。Kalkatungu は例えば一般的な語ブーメランを yalkabari と言っていたが、フルートのような音を出すブーメランを purda-purda と言い、弓なりになっていないブーメランを marabila と言い、端にフックのついたブーメランを tyuku-tyuku と呼んだ。Pitta-pitta は一般的には槍の言葉 makuwarta であるが、手で投げられたすなわち marimu は槍の先端に丸くつけられた物、tampara とは、槍が平らなもので投げ棒 pirt-yamaru の言葉である。

二つの文化がいかに同じ現象に関して異なった区別を示すかは彼らの異なった生活様式に用いられた言葉を見ればうなずける。次の例は kalkatungu 族に使われた語の例である。

	男性	女性
赤ちゃん	pirla-pirla	pirla-pirla
思春期近くになると	kuyiri	wamba
最初の儀式で	yapariri	iradyi
次の儀式で	uparindyi	walumara
三度目の儀式で	kantapiyangu	munta-munta
成人	yuru	marapai
老人	kupanguru	mutyu-mutyu

pirla-pirla の語は英語の baby よりも長い間使われていたがヨーロッパ文化には何らその写しは無い。その儀式は成人になるための割礼などの儀式も行われる。Yuru という言葉やアボリジニーの言語は決して白人に対して使われたものではなかった。概して marapai のような語は特にアボリジニーの女性にとっての語である。

< 語形成 >

全ての言語のように、オーストラリア・アボリジニー言語は何らかのルーツで出来上がっている。接尾語、合成語、反復語、などを使っている。Pitta-pitta は例えば接尾語をつけて名詞から動詞にできる。Karna (男) 語に、kurri を加えると karnakurri は動詞となり、男(成人)になるという動詞となる。例えば、割礼の儀式をとうして男性と認めるのである。nupu (配偶者) と parta (略奪) を1語にすると、文字通り配偶者を略奪することすなわち結婚を意味する nupuparta という語を形成する。重複や二重語はアボリジニー語のなかで、最も人気のある語形成である。mayi の語の重複は mayimayi となり、それは dirt を意味する。また、fire を意味する maka は重複し、hot を意味する makamaka となる。名詞の重複の結果、形容詞を作る。動詞は繰り返し使われ、繰り返し返される。Tarri は crawl (はう) を意味し、tarritarri は(はうこと)を意味している。

いかなる言語においても言語は基本となるもの、または中心となる意味、そして拡大された意味を持つ。例えば、英語における head は体の頭の部分を示しているが、学校などの校長やある意味では leader を示す言葉でもある。体の部分を示す名前は一般に広められ、アボリジニー言語に於いて mouth の例を見ると、動物の穴、洞穴や入り口に言及される。又、腕は動物の前足や鳥の翼を意味し、大腿部は木の幹を意味し、kalkatungu 語では、目にあたる語は種や星、そして雨の一滴にも言及する。アボリジニー語は髪、草にも同じ語を使っているが、一つの意味が基本で他の由来は明白でない。一つの語は胸とミルクを含むが胸とミルクの関係は単なる拡大ではない。アボリジニー文化に於けるミルクは通常哺乳動物の胸を除いては見られず、乳を吸うような句はその意味にとられ、その結果胸としての語は同様ミルクとして翻訳され

る。

月を表す語は通常ある時間帯に用いられてきた。それは、英語で month を示し、太陽の語は day に用いられた。距離は通常、移動時間の語に計算された。川は英語をはなす人が two days march というように、two days away と云われた。

Sit down の語は普通 stop, remain, live in, 英語での is, are, のような動詞の意味に拡大されている。

a Pitta-Pitta の文章をみると

kupakupa-nga piyawarli Cloncurry-ina nangka-ya これを英語にすると

The old man's dog is in Cloncurry. の意味となる。

動詞 nangka は座る意味であるが、英語の is のように意味の無いものである。

Nangka の機能は過去、現在、未来まで言及できる。—ka を語尾につけると Nangka は次のように表せる。

The old man's dog was in Cloncurry. となる。

アボリジニー言語で、grass と hair をカバーするのは一語であったが、一語で一つの意味形成は基本的と決めるのは必ずしも可能ではない。例えば、普通 body hair と毛皮をカバーする。又人の皮膚あるいは毛皮、動物の隠れ家など skin でカバーする。しかし、この事は我々にとって驚きはない。と言うのは、違った生き物の表現との唯一の現象があるので、我々は皮膚や隠れ家を考える。また、skin は木の皮 bark も含む。唯一 raw と云う語は uncooked を表し、果実など青い、熟していないものは uncooked, unripe で表している。uncooked と unripe は普通食べる準備

がしていないものを、一方 cooked と ripe は食べられる状態を言う。

しかし、cooked そして ripe が同じ語であるのは人々にとって不都合であるかもしれない。例えば、彼らは果物を調理する。人々はリンゴや桃シチュウを調理するかもしれない。ある場合、一つないしは二つの言語に特徴的な比喩的がある。

例えば、kalkatunga 語で妊婦は having a stomach を puduyan で表し、妊娠するのは ardi でこれは卵を抱くのに用いられる動詞である。赤ちゃんが生まれると miltitadi すると云われる。赤ちゃんは pirki-pirki または bloodwood と言われ、生まれたばかりのしわのよった皮膚を表している。

ポートジャクソンの語彙表を見ると、オーストラリアで現在も使われているものがある。bogey は入浴を意味し、cobra は頭、dingo は野犬、murry は強める表現に用い、pyalla は話すことに、myall は野生のアボリジニー、budgerie はすばらしい意味に、wallaby は小型カンガル、woomera は投げ棒、woomerang は貧しい意味に使われている。形容詞 wee-ree は悪いを意味し、例えば賛成、反対を表すにも使われる。

アボリジニー語からの借用語範囲や特徴については、オーストラリアの英語 W・S ラムソン (オセアニア出版) 第 6 章 page111 を引用すると、1850 年以前使用されていたと言う記述がある。それによると、かなりの割合を占める語は、アボリジニーの生活様式と関係がある。彼らの習慣、住居、道具や人間に関する名称である。boomerang ブーメラン、coolamon 木製の皿、mogo 斧、特に話し言葉に借用された語は次の語群である。

baal 反対、binghi 兄弟、bogey 風呂、murry 手、gibber 岩、石
budgerie 良い、jumbuck 羊、など他にもある。

現在では廃語となっているものも数あるが、アボリジニーが生活のなかで使用した言語が現在も借用されていることは明らかである。樹木、野草からとった語は多い。

bunnya bunnya は名高い木のことで、その果実は栄養価もあるとされ、アボリジニーは好んで噛んだ。しかし、噛むとしばらくしていい気分となった。後になり それは一種の麻薬であると入植者たちは気がつくのであった。

19世紀の間、dingo と warrigal はアボリジニーには同一物を意味していた¹⁾。しかし、動物的な特徴を表す人に対して、比喩的に使った場合は別として dingo は特殊な犬であり warrigal は広い範囲の意味を持った。そして、更に野蛮、犬、馬、の同意語として使われていた。現在使われている wallby も wombat もポートジャクソン語であり、入植当時から使われていたものと考えられている。

Koala も OED に koolah とある。最も初期の spelling は colo, cola, coloo, coola, は全て第二音節語であった。魚の名前は特定の地方に限られて使用された。Barramundi は burramundi と書き、広く知られている魚で、クインズランドの魚である。Yabby はザリガニのことでほとんどの州で使われた。

鳥の名前は彼らが泣き声を真似て作ったものが今も残されている。例えば、boobook はカラスを意味して mopoke に鳴き声が似ているとされている。Kookaburra は19世紀の終わりごろオーストラリア英語に使われ注目をあびた。しかし、不思議なことに1826年に cur-ow-ung と記録がある。人々はその鳥が奇妙な鳴き声なので、laughing jackass とか morning clock と呼び、好感を持つようになった。この kookaburra の語は生き残りと言える。Galah は色はピンクと灰色で、パタンインコのこと、比喩的に馬鹿の意味である。ところで、彼らが食用としている虫がある。witchetty と呼び 西オーストラリアで

は bardi と呼ぶ。

また、Tシャツなどにも愛用されている言葉に billabong がある。この語はモリスによるものである。彼は、この複合語の2つの要素はニューサウスウエルズのウイラドフリ方言から派生したものと云う。というのは、billa はウイラドフリ語の川を、ないしは、bung は死を意味する。ところが実際は、bong はウイラドフル語ではなく、クインズランド・アボリジニー語に由来している。例えばこの語は、1840年代ブリスベン郊外の Humpty-bong の名前の中に出てくる。多分英語の俗語 bung に影響されて、その世紀の後半にはアボリジニー・ビジン語の中にかなり広範囲にわたって見いだされる語となったものであろうと記載がある。

Billa は明らかに水を意味していた。1836年から1869年までの間の、その語の意味の発展は、三段階分かれていると考えられた。最初はベル川だけを意味し、次は干しあがった川床や水溜りを意味し、1862年までは、干しあがった小川や川に使われた。W.ランズボロー (landsborough) は、オーストラリア北端の地にあるマカダム川 (macadam) のことを次のように書いている。

南では、マカダム川のような小川は、水差し (billy) に水を汲めずに空 (bong) にしたまま戻ったということから、billonn と呼ばれた。

シドニー・ベイカー (Sidney J. Baker) が、スコットランド方言であることがほぼ確か billy を、アボリジニー語の billa から生じたというのは、ランズボローの解説のせいであるといわれている。

Corroboree は神聖な、祝祭の意味で使用されたが、比喩的な意味で用いられた。二つの最も比喩的な意味が一般化し、corroboree は人々の集会、騒音、騒動という口語にも用い

られるようになった。Ginとlubraはアボリジニーの女の意味に用いられたが、ginは原住民の黒人女に使われる語であるとC.P. ホジソン(Hodgson)はReminiscences of Australiaの中で述べている。18世紀後半ginとlubraは一般的なアボリジニー語となった。最近の調査によると、オーストラリア英語に通用する語数は減少し、数十語が知られるほどになってきている。将来これらの語がいつまで存続するかわからない。しかし、数は確実に減ってはいるもののオーストラリア以外の旅行者用案内書 The great Australian Lonelinessにはこれらの語の紹介がある。と言うことはアボリジニー語のオーストラリア英語に対する影響力があることである。オーストラリア人のアボリジニイ人、アボリジニー語に対する態度は学校教育、社会教育のなかでしっかりと受け止め、お互いの文化を尊重している姿勢に敬意を払いたく思う。

注

- 1) オーストラリアの英語 W.S ラムソン 第六章 Page21-Page23引用

参考文献

- Baker, S, J. The Australian Language, Angus & Robertson, Sydney 1945
 Barry, J. Blake Australian Aboriginal Language, Universit of Queensland Press 1991
 Morris, E.M. A dictionary of Australian Words, Phrases and Usages Macmillan, London, 1898
 Macquarie Univ. The Macquarie Dictionary 1999
 G.A. Wilkes. A Dictionary of Australian Colloquialism 1999
 Douglas, W.H. The Aboriginal Languages of the South-West of Australia Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra, 1976
 Yallop, C. Alyawarra, an Aboriginal Language of Central Australia Institute of Aboriginal Studies, Canberra, 1977